

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010 ～ 2011

課題番号：22700724

研究課題名（和文） 中国・内モンゴル自治区における「逆留守子ども」の生活環境に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Current Living Environment of 'Counter Absence of Children' at Inner Mongolia in China

研究代表者 婭 茹 (YA RU)

奈良女子大学・人間文化研究科・博士研究員

研究者番号：50570256

研究成果の概要（和文）：

草原地域（牧畜区）であるシリングル盟の東・西ウジムチン旗において、教育を受けるため家から町へ出て来た子どもを中心に子どもの生活実態を把握するとともに、保護者の意識、学校の取り組み、行政の政策を明らかにした。また、牧畜区の家から離れて暮らす子どもの直面する諸問題点を分析し、牧畜区の子どもの成長発達を応じたかつ伝統文化の継承を配慮した生活環境づくりを検討した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, the survey was conducted at grassland region (livestock district) of East Ujimqin Banner and West Ujimqin Banner in Xilin Gol League. Many children had to leave home and enter into city for education in this area. Therefore, these children's current living condition was studied, and the feelings of the guardian, the efforts of the school and some administrative policies were made clear. Some problems that these children faced directly was also analyzed, and it's discussed that how to make living environment which inheritance of traditional culture concerned in accordance with children's growth and development in livestock district.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会生活環境学

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：モンゴル族 子ども 生活環境 内モンゴル 中国

1. 研究開始当初の背景

内蒙古（内モンゴル）自治区は、中国の辺境地域であるが、近代化、都市化、漢化などの影響により、モンゴル民族の生活様態の変

容がみられる。その中で生活水準の向上が見られる。一方、モンゴル民族の固有の文化・生活は希薄になりつつある。民族文化の継承には子どもの頃が重要な時期である。そこで、

子どもを取り巻く生活環境の変貌が著しい。具体的に以下の3点が挙げられる。

(1)教育環境の変化である。1998年には中国全体で大規模な「撤郷・苏木(ソム)并鎮」行政区画改革が行われ、それとともに学校も統合され、自宅から通えない子どもが多数にのぼった。このような状況は、中国の西部地域で主として生じているため、2004年「西部地区農村寄宿制学校建設工程実施法案」(以下、寄宿制)が策定された。内モンゴルはモンゴル民族の自治区であり、都市・農村以外に比較的モンゴル民族が多く居住している牧区(以下、牧畜区)という内モンゴルの特有の地域がある。この牧畜区でも同様なソムを廃止し、鎮へ合併する行政区画改革が進められ、それに伴ってソムの学校は廃校となり、鎮の小学校に統合された。牧畜区は面積が広く、住居が分散しているため、鎮の小学校は遠く、牧畜区の子どもの家から通えなくなった。

牧畜区の子どもの親が出稼ぎで都市に行った「留守子ども」とは逆に、子ども自身が親元から離れ、町に出るといった事態になった。親から離れて「町に出た子ども」には「留守子ども」と類似の問題が懸念される。しかし、「留守子ども」への関心が高まっているにもかかわらず、牧畜区における「町に出た子ども」(社会の注目を集めている中国農村の「留守子ども」問題に対し、まだ関心が低い町にきた子どもを「逆留守子ども」と称する)の問題に関する研究は見当たらない。

(2)遊び環境の変化である。モンゴル民族の伝統的な遊びと言えば、「モンゴル相撲」、羊のくるぶし関節骨の「シャーガ」遊び、「モンゴル将棋」などがある。牧畜区では、子どもの間に伝統遊びはみられるが、「逆留守子ども」は町に出ているため、テレビやボールなどの遊びがよくする遊びとなっており、伝統遊びの衰退が懸念される。

(3)家庭環境の変化である。1979年に「1人っ子政策」が実施され、少数民族は2子まで許可されているが、以前と比べ、子どもは少人数となった。子どもが少ない家庭において、保護者の子どもに対する希望、教育に対する関心が高い。一方、子どもに対する過保護の問題が指摘されている。

2. 研究の目的

牧畜区の子どもの成長発達を応じたかつ伝統文化の継承を配慮した生活環境づくりへの提言できることを目的とする。目的を達成するため、以下の4点を明らかにする。

一つめは、「逆留守子ども」に対し、さらにきめ細かい学校生活、家庭生活、遊びといった生活実態を把握する。

二つめは、保護者の意識を明らかにする。現在、「逆留守子ども」の町での暮らし形態は保護者の影響が大きいと考えられる。そこで、保護者の考え、希望、心配などの点について、意識の調査を行うことによって、問題の解決には重要である。

三つめは、学校の教育方針、生活援助の内容等を把握する。「逆留守子ども」に対し、学校側は政府の援助を受け、「学生寮」を提供している。しかし、学生寮の利用状況は3割にとどまっている。その要因を探る。

四つめは、行政の教育・支援政策等を把握する。「逆留守子ども」問題の出現は、行政の政策がもっとも大きい影響によるものである。この問題の解決には、行政からの政策や支援が大きな力である。

3. 研究の方法

中国・内モンゴル自治区において、モンゴル民族の比率が高く、典型的な牧畜区であるシリングル盟の東ウジュムチン旗と西ウジュムチン旗を調査対象地域とする。研究の目的に応じて、現地調査は「逆留守子ども」の生活実態調査、保護者の意識調査、学校へのヒアリング調査、行政へのヒアリング調査を実施した。調査の日時は、2010年7月12日「寄宿制教育方針」について、教育関係の行政へヒアリング調査を行った。2010年8月西ウジュムチン旗における家庭訪問による子どもの生活実態調査、保護者の意識調査を行った。2011年1月4日～2月18日東・西ウジュムチン旗における学校への調査、子どもの生活実態調査、保護者の意識調査、学校と行政へのヒアリング調査を実施した。

4. 研究成果

シリングル盟の東ウジュムチン旗と西ウジュムチン旗において、学制寮や食堂等整備された寄宿制モンゴル民族の小学校は各1校がある。2校とも子どもの生活実態、保護者の意識、学校側の取り組み、行政からの制度が類似している。

(1)子どもの生活実態

①通学形態

子どもの通学形態に関しては、家庭に任せしており、調査した事例により、多くの子どもは学校の寮に入居せず、通学方法等は個人的、家庭ごとに解決を図っている。寮に入居していない要因は、保護者が子どもの学生寮での生活に対し、不安や心配を抱かれている。また、子ども自身が「寮に住みたくない」理由も挙げていた。

牧畜区の子どもの、小学校に入学(7歳)するとともに牧畜区の家から町に出てきて教育を受ける。そのなか、多くの子どもは親元から離れて町で暮らすことになる。また、幼稚園の入園から牧畜区の家・親から離れる

子どももいる。

町での就学形態には、学校の寮に入居しているほか、多数の子どもは、主に「祖父母が同伴して町に出てきて借家する家庭」、「祖父か祖母のどちらが同伴して町に出てきて借家する家庭」、「町で暮らす祖父母の家に住む家庭」、「祖父母以外の叔母などの親戚の家に住む家庭」、「知り合いの他人の家に預かってもらっている家庭」等がある。

② 普段の生活時間

子どもの普段の1日の生活は下記の表1(学生寮に入居している子ども)、表2(学生寮に入居していない子ども→通学生)の通りである。学校の寮に入居している子どもは、通学生よりやや早めに寝起きしており、規則正しい生活リズムで暮らしている。

表1 寮生の生活時間割

起床	5:40-6:30
朝体操	6:30-7:00
朝食	7:00-7:30
授業に行く	7:30
お湯準備	11:40-12:00
昼食	12:00-12:40
昼掃除	13:20-14:00
授業に行く	14:10
夕食	17:30-18:00
テレビ見る	18:20-19:00
自習時間	19:00-19:30
洗顔、足浴等	19:30-20:00
寝る準備	20:00-20:20
消灯	20:30

表2 寮生以外の生活時間割

起床	6時頃
朝食	6時頃~7時頃
学校に行く	7時頃
帰宅	12時頃
昼食	12時-13時頃
昼休み・遊び	13時頃-14時頃
学校に行く	14時頃
帰宅	17時頃
夕食	17時頃-18時頃
宿題・遊び	18時頃-21時頃
寝る	21時頃

③ 遊び

遊びは、子どもの生活の重要な一部である。牧畜区の子どもは、町に出たことにより、変わった環境の中、遊び内容、遊び集団、遊び場も変容している。

牧畜区では、モンゴル民族の伝統的な遊び「シャーガ」、「相撲」、「羊・動物との遊び」などをよくしている。町では、「テレビを見る」、「縄跳び」、「ボール」遊びがよくする遊び内容となっている。

よく遊ぶ相手については、牧畜区では主に親族の「祖父母」、「兄弟・姉妹」、「いとこ」となっており、近所とは居住距離があるため、たまに近所の友達と遊ぶ。町では近所の友達とよく遊べるようになっていく。牧畜区では各住居が分散しており、近所との距離は最短で1km以上離れていることから、日常的には一緒に遊べない。一方、町での住居は近所と連続している居住形態であるため、近所の友達とよく遊べるようになったと考えられる。

よく遊ぶ場所は、牧畜区では「屋外」であるが、町では「室内」もよく遊ぶ場所の一つ

となっている。これは、町でよく遊ぶ内容が「テレビ」になっていることと関連しているといえる。

④ 帰宅(牧畜区の家)頻度

「逆留守子ども」は、約20kmから約200km離れた牧畜区の家から来ている。牧畜の家と町の学校との距離により、毎週末に帰宅と学校の連休や、夏と冬の長期休みのとき帰宅するという現状にある。

子どもの親も町に来て、子どもに会いに来ているが、「月に1~2回程度」、「牧畜区の忙しい時期には来られない」、「年に数回」というパターンがある。

⑤ 地域の祭・行事の参加状況

モンゴル族には、一年中に「オボー」祭り、「ナーダム」大会、「高齢者の祝い」などの伝統的な祭・行事が少なくない。子どもが在学中は、牧畜区の祭りや行事にほとんど参加できない。学校の休み中に都合が合えば、「オボー」祭りや「高齢者の祝い」に参加するという。

(2) 保護者の意識

① 子どもへの教育期待

以前と比べ、子どもが少なく「3人家族」、「4人家族」が主な家庭構造となっている。保護者の子どもに対する教育期待では、最終学歴は大学或いは子どもに任せると答えており、子どもに就かせたい職業では子どもに任せると答える保護者が多いが、牧畜業に就かせたくない保護者もいる。子どもに伝統文化を継承させる意識が薄い。また、「母親と町に出かけて借家」パターンの若い母親である保護者自身でも町に出かけたことにより、牧畜区へもう戻りたくないという生活様式に対する考えに変化が起こっている。さらに、関係行政のヒアリングによる離婚の家庭が増えているなどの問題等が生じている。

② 保護者の不安・心配

子どもが牧畜区の家、親元から離れ、町に出ることにより、保護者の子どもに対する不安や心配も様々である。まず、学生寮の生活に慣れるかと不安を持つ保護者たちは、子どもに学生寮に入居させていない。次に、町では車が多く、子どもと町で借家して通学の形態や子どもが町で居住している親戚の家から通学の形態などの「通学生」の保護者は、子どもが小学校3年生までは登下校は送迎するようにしている。

(3) 学校の取り組み

教育方針では、東・西ウジュムチン旗の2校ともモンゴル語による授業を行う。学校ごとに「馬頭琴」、「モンゴル将棋」、「オルティ

ンドー)、「モンゴル相撲」といった伝統文化の教材を作成し、授業を設けている。授業以外の課外活動の時間では、伝統遊びをさせている。学校側の伝統文化の継承を重視していることがわかる。

子どもの生活の面では、家庭に対する経済的な支援や児童心理のカウンセラー等の取り組みがみられていない。

(4) 行政の方策

① 「寄宿制教育」

「寄宿制教育」制度は、全国の少数民族の地域と農村部の山間地域に推進されている。寄宿制教育方針の目的は、教育資源の利用率を高めることと教育質を高めることである。

2004年から内モンゴル自治区を含めた「西部地区農村寄宿制学校建設工程実施法案」の実行により、寄宿制学校の建設に加速された。

寄宿制学校の建設費用は、牧畜区・農村の一般学校の建設より3~4倍の費用がかかるという。現段階全国範囲で、「寄宿制教育」は教育環境の改善や教育質の高めとして評価されているという。

② 行政からの支援策

行政は、牧畜区と農村地域において、義務教育段階の貧困家庭に対し、「兩免一補」の経済的な支援策を実施されている。そのなか、寄宿制の貧困家庭に対し、食事費、寮費といった生活補助を行っている。生活補助金は、1人1年に500元(約6200円)である。学生寮に入居していない子どもには、生活補助の支援を行っていない。

子どもの世話のため、「逆留守子ども」と同伴に町に出てきた親や祖父母の保護者・家庭に対し、行政からの支援はない。

(5) 生活環境づくりへの検討

① 子どもの生活環境

子どもが教育を受けるため、幼い時期から牧畜区・親元から離れ町に出ることにより、生活環境が大きく変化した。

現段階、「寄宿制教育方針」は評価されているが、それに伴って新たな問題が生じていることは事実である。「逆留守子ども」の町での通学形態において、寄宿生は学校での学習時間の以外、遊び・生活の時間もすべて学校内で行うことになる。そこで、学校側は学校教育の役目を担いながら家庭教育の役目もいかに果たすべきかを検討する必要がある。また、「留守子ども」では5歳以下の幼児は情操面や社会性の発達面で問題があると指摘されている。「逆留守子ども」では、乳幼児期は両親のもとにいるが、幼稚園や就学前教育の時期、低学年で同様の心配がある。親が町に出て子どもと交流できるための支援や児童心理のカウンセラー等が必要と思

われる。

現在、学生寮に入居していない子どもは少なくない。寄宿生活に対し、子どもや保護者が持つ不安を解消するには、子どもが安心して家庭的な雰囲気の中で暮らせる寮の生活環境整備や生活支援体制について検討する必要がある。

子どもと同伴して町に出てきた保護者自身も牧畜区の生活様態に対する思いや考えなど意識の変化が起こり、離婚の家庭が増えるなど子どもの心身とも健やかな成長発達にはマイナス要素である。生活の基盤である安定した家庭づくりには、行政や地域などの保護者や親への教育や指導などの支援ネットワークづくり、同じ立場の人同士のネットワークづくりが必要である。

また、「逆留守子ども」家庭においては、町に出ることで二重生活が強いられるため経済的負担が大きいとともに、牧畜区から保護者として出てきた場合は牧畜区での人手不足ももたらしていると推測される。経済的支援や地域、行政などの生活支援ネットワークの構築などが今後の課題である。

② 伝統文化の継承

牧畜区では、よくしていた伝統的な遊びが町ではしなくなる傾向がある。町の学校では、授業以外の余暇時間に伝統遊びをさせているが、普段の遊びでも自然に伝統遊びをするように繋がるのが期待される。

また、「逆留守子ども」は、町にいる時間が長く、モンゴル族の日常的な生活の中で自然に親、家族の生活から民族文化の継承ができない。また、地域の民族の生活にとって重要な祭りや行事に帰れておらず、環境の変化がもたらした結果である。伝統文化の継承しにくい問題が指摘される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

①ヤル, 中山徹: 中国・内モンゴル自治区における「逆留守子ども」の生活環境に関する研究, 一シリング盟の西ウジュムチン旗を事例として, 日本家政学会第63回大会, 研究発表要旨集, p. 91, 2011年5月29日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

婭茹 (YA RU)

奈良女子大学・人間文化研究科・博士研究員
研究者番号: 50570256